

る」の意を有せる形容詞、即ち「力」の意に相當す。次の毗伽は「賢き」なる語なること上述の如し、始めには譯して其の意を傳へ、茲には其の原語を音譯したるにすぎず。

公主は勿論漢語に外ならざれども、然も注意すべきは、此の語は少くとも唐代の突厥、回鶻族等の間には、既に彼等自身の言葉として、普通に用ゐられたるが如く、新疆出土の回鶻譯佛典に屢々見ゆる *Qunçui* なる語は即ち之にして、王女等を指す時に用ゐられ、殆んど其の儘に漢語を寫したるものなりとす、思ふに支那の公主、もしくはは公主と稱するものが、北方民族に降嫁せしことは、遠く漢代に其の基を開き、突厥族の興起に及びては、魏、周より以下唐代に及びても其の類例頻々たり、されば公主なる語は自から彼等の間に熟知せられ、また使用せられたりしものなるべし。

雲中の名は遠くは秦漢時代より聞え、後には後魏の都として有名なる地にして、貞觀以來は單于都護府の轄する所なり、北方民族の降歸するや唐は屢々之を此の地方に置き、從がつて其の首領を刺史、郡公等に封じたることも多く、假令ば、開元年間郁射施大酋鶻屈頡斤を雲中郡公に封じたるが如きは其の一例なり、郡夫人の位は當時上州刺史夫人等に與へられたる處なるが、公主の夫は次に見ゆるが如く雲中郡開國公なりしを以て、之を郡夫人に封じたるものなるべし。

阿那氏といふものは、突厥の姓阿史那氏の略にして、之と同様の例は阿史德なる姓を阿德と記するが如きに於て認むべく、即ち新唐書地理志定襄都督府の條に阿德州を擧げて阿史德部を以て置きしことを記するが如き之れなり。